

會 報

第21号

編集・発行人 支部長 浅子逸男

イソギンチャクとクラゲ——支部長職を終えるにあたって

大橋 殺彦

先日TVでイソギンチャクの泳ぐ姿を見て「へえー、潮溜まりの岩に貼り付いてるあれが……」と思った。調べ

たらたしかにフウセンイソギンチャクやオヨギイソギンチャクとやらがそれにあてはまるらしい。天敵のヒトデに襲われた時にそういう行動をとるとのことだが、中にはいつまでも同じ場所にとどまっていることが厭になって、ついふらふらと触手を振って泳ぎ出す奴もいるんじゃないか。

言葉の相似による連想は「磯巾着」から「腰巾着」という語を招き寄せる。そうして、ずいぶん前の映画「火宅の人」の一場面も。中野の酒場「おかめ」での乱闘事件を脚色したこのシーンで、真田広之演じる中原中也に絡まれ「太宰の腰巾着は黙ってるい」という言葉を浴びせられた途端、緒方拳演じる主

人公は殺気を帯びて中也に飛びかかっていったのだった。

話はイソギンチャクに戻って……。泳ぎ出したはよいがそのまま外海に連れ出されたらどうなるだろう。次の連想は「ゆられ、ゆられ／もまれもまれて／（中略）／だが、ゆられるのは、らくなことではないよ。」（金子光晴）という言葉の口にするクラゲの身上へと飛ぶ。漂うことのしんどさ。「外からも透いてみえる」ようになった体に入ってくる海水だつてひりつくように痛かろう。でも、そのしんどさや痛さが、自分が「磯巾着」「腰巾着」状態を脱することの証しだとしたら、「秋なれば／くらげ渚に／うちあげられ／玻璃のごとくなりて死す」（室生犀星）となったっていいのではないだろうか。

支部大会案内

二〇一五年度

春季大会

於・武庫川女子大学

六月六日

(土)

午後一時より

〔プログラム〕

開会の辞

武庫川女子大学文学部長

玉井 暉

中島敦〈南島譚〉考

— 〈病〉と〈南洋〉

杉岡 歩美

自由発表

徳富蘆花「灰燼」と〈西郷隆盛〉

平石 岳

質疑応答

閉会の辞

支部長 浅子 逸男

『草枕』

— オフェリヤの「合掌」を中心に

原田 のぞみ

総会

「文章世界」の小説指導

— 田山花袋編『二十二篇』に見る

その傾向

山本 歩

〔発表要旨〕

徳富蘆花「灰燼」と〈西郷隆盛〉

太宰治「きりぎりす」の一考察

— 「背骨にしま」われた「私」の葛藤

山田 佳奈

平石 岳

西南戦争中からジャーナリズムによ

って喧伝された西郷隆盛らの戦闘は、錦絵や絵本によって物語化され、西郷の死後も「西郷星」や生存説が度々噂になり、正三位も追贈された。このような〈西郷隆盛〉の世論人気と社会的復権は、明治三年の上野公園西郷隆盛像に結実することになった。しかし、犬を連れた兵児帯姿のこの銅像は、小騒動を引き起こすことになる。

本発表では、上野西郷像落成前後の雑誌新聞言説を確認し、その上で徳富蘆花「灰燼」（明治三三年三月）において、「疫病神」「福神様」と変転する〈西郷〉の評価に注目する。「灰燼」では、西南戦争に西郷側として従軍した上田茂が、家名を楯に自刃を迫られた後、「村の悪感」が上田家に向けられ、その際の「言葉」「囁」は、「幸福な者」「嫌な者」と変転する。それは、作品内での〈西郷〉への評価に重ね合わせられており、「叛逆者」であり「英雄」でもあるという〈西郷〉の

二面性が巧みに用いられているのである。

ベストセラーとなった作品集『自然と人生』の巻頭作としてある程度の評価を得ている「灰燼」ではあるが、本発表では初出の『国民新聞』版を参照する。実兄蘇峰が帝国主義・膨張主義へと「変節」し、強烈な批判を受けながら自説を展開していく『国民新聞』上で、西郷びいきの蘆花が、新聞小説としての「灰燼」をどのように構成していったのか。これまであまり注意されていなかった蘆花のメデイア意識と、民友社作家としての文学的営為を探りたい。

『草枕』

— オフェリヤの「合掌」を中心に

原田 のぞみ

『草枕』におけるJ・E・ミレイ「オフェリーリア」(一八五二—一八五三)の「合掌」については、「漱石は『草枕』のテクストに、ミレイの原画にはなかった祈りの手を作為的に持ちこんだのだろうか。あるいは、ただの記憶の誤りにすぎなかったのだろうか」(前田愛)。「画工であるにもかかわらず、そんな不注意をおかす「余」(中山和子)とも言われてきた。しかし『草枕』での「合掌」は、西洋キリスト教美術におけるオランソの翻訳と思われ、漱石はミレイ「オフェリーリア」の原画にある、魂の救済のポーズにも注意を払っていたことが窺える。

溺死する直前に「合掌」(オランソ)して川を流れるミレイ「オフェリーリア」に対し、画工は「ミレイはミレイ、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衛門をかいて見たい」として、苦しみなく楽しんで「往生」する那美を画題に選ぶ。『草枕』では

様々な東西の事物が対比されるが、ミレイ「オフェリーリア」と画工の構想する画題との間にも、キリスト教的要素と仏教的要素の対比がなされていると思われる。他にも、『草枕』に登場する水死の女性のイメージには「功德」や「南無阿弥陀仏」など仏教的な救いのイメージが絡み合っており、「ただ美しい感じが読者の頭に残りさえすればよい」として書かれた『草枕』ではあるが、その背後には、漱石の無意識や強迫観念のなかにある生死観のテーマも潜んでいるのではないかと推測される。

「文章世界」の小説指導

— 田山花袋編『二十二篇』

に見るその傾向

山本 歩

本発表は、田山花袋研究からの展開として、博文館投書雑誌「文章世界」における小説の指導形態について考察するものである。とりわけ、明治四十三年一月に花袋選として刊行された、投書傑作選『二十二篇』を中心に論じたい。

『二十二篇』には、水野仙子をはじめとして「文章世界」常連投書家、計十三名二十二作品が収録された。元より、「文章世界」上で花袋が選者をしてきた「懸賞小説」欄の受賞作を選りすぐったものだ。すなわち、花袋の求める文学青年像に基づき選抜されている。作品は、①ローカルな事象の「観察」「描写」、②生活の倦みや寂寞を主題とする、③感傷の排除、という事項を含有しており、そこに花袋が育成しようとした作家像が見てとれる。

花袋の小説選評は、彼自身の主張の変遷と、本質的な趣味に左右されながらも、投書家に一定の傾向を強いるこ

ととなった。彼ら彼女らの〈書く〉行為に、自己慰藉以上の意義を与える一方で、それは作品内容を限定していくこととなる。一方、その指導の絶対性を支えたのは、作家が「先生」すなわち教育者として見做されたことだろう。小説の創作法を矯正し、折々には地方に生活する彼ら彼女らの生を肯定する、そのような言説にこそ、「文章世界」の誘引力はあったと思われる。

誌上の言説は、編集者前田晁をして「主義の宣伝と使徒の養成」と言わしめた。その意義と弊害を具体化するとともに、埋もれていった「投書家」たちの存在を明らかにしていきたい。『二十二篇』は現在、国立国会図書館ウェブサイトに「近代デジタルライブラリー」から閲覧が可能である。

太宰治「きりぎりす」の一考察

―「背骨にしま」われた

「私」の葛藤

山田 佳奈

太宰治「きりぎりす」は、昭和十五(一九四〇)年十一月一日発行の「新潮」に発表された。「おわかれ致します。」の一文で始まるこの小説は、画家で夫の「あなた」との結婚生活を振り返る「私」の、女性一人称語りで描かれている。中でも「私」が、「小さいきりぎりす」を「背骨にしまつて生きて行こう」とする最後の場面は印象深い。「きりぎりす」は、同時代から現在まで、〈俗〉と〈反俗〉をめぐって議論がなされ、「私」は常に〈反俗〉の役割を担ってきた。本発表ではこの構図を打ち破るべく、〈読者〉を問題視する。具体的には、①太宰らしき人物を視点人物とする癖、②男性中心主義に基づ

いて読む癖、読者のこれらの癖が、「あなた」の視点で語りを読解する原因になっっていることを述べる。しかし、「きりぎりす」が女性一人称語りである以上、「私」の語りは、本来「私」の視点から捉えるべきである。こうした観点から語りを検討すると、存在意義を認めてほしい思いと、自立が難しい現実との間に生じた「私」の葛藤が明らかになる。「私」はこの葛藤を「背骨にしまっ」た。つまり、語りの目的は「私」の気持ちの整理にあり、決して〈反俗〉にあるのではない。

本発表では、この読みを丁寧な分析のもとに実証し、「きりぎりす」の新解釈だけでなく、自らの先入観に無自覚な読者を明らかにする。これらの指摘は、太宰の女性語り作品を読む際の陥穽に言及することにもなると考えている。

中島敦《南島譚》考

―〈病〉と〈南洋〉

杉岡 歩美

中島敦は自身の〈南洋行〉体験（昭和十六年六月―昭和十七年三月）のあと、昭和十七年十二月に〈南洋もの〉として《南島譚》との総題のもとで「幸福」「夫婦」「鶏」の三篇を発表している。

本発表では、まず、当時の〈南洋〉における〈幸福〉概念が、近代的「教育」と近代的「医学」によって、その「原始的なる」生活を改善すること、つまり「島民教化」に結びついていた点を明らかにする。たとえば、後に中島自身も編纂に関わった「南洋群島国語読本」の第二次編纂根本方針にも「一に国語を学習することによって、島民の幸福を増進することを第一義と致しました」と明記される。また、矢内原

忠雄『南洋群島の研究』には、「日本時代に於ては、医療機関の増加は普通教育機関の増加と相併ぶ二大文化的施設」とある。ここから南洋庁が、「教育」と並ぶ「島民教化」の方法として「医療」を重視した方針が見受けられよう。

そのうえで、中島の「幸福」「夫婦」「鶏」の三篇に〈病〉というキーワードが共通していると指摘したい。「幸福」には「文化」のもたらした「悪い病」に罹った「男」が、「夫婦」には「悪い病のために鼻が半分落ちかかつてゐたが、大変広い芋田を持つた・村で二番目の物持」である「男」が、「鶏」には「喉頭癌とか喉頭結核とか」に罹った「マルクープ老人」が描かれる。これらの〈病〉の描かれ方を通して、中島が〈南洋〉での〈幸福〉をどのような作品に入れ込んだのか、考察を深めていきたい。

支部大会報告

二〇一四年度 秋季大会

二月一日(土) 於・京都教育大学

大会発表を終えて

発表を終えて

小橋 玲治

私は元々比較文学の出身であり、近代文学会での発表は初めて、言わば「他流試合」をお願いするという気持ちで、非常に緊張して今回の発表に挑んだ。

そして、発表を終えて最初に抱いたのは、やはりやってよかった、ということごく単純な気持ちであった。と同時に、有島武郎という作家について、まだまだ勉強不足であるとも痛感した。

どの国のものを扱うにせよ文学研究のオーソドックスな手法は「作家研究」

であろう。一方、私の主たる研究対象は「表象」であって、それはある特定の作家の内部の問題としてのみ還元できるものではない。しかし、だからといって、それは作家研究を疎かにしていいという言い訳にはなるまい。先人たちの研究を参照しながらそれを更新していくというのが研究者たる者の務めである。今回の自分の発表では、有島武郎による女性教師の描き方がいかに新しいものであったかを主眼とするあまりに、己の主張のどこが、「作家研究」を含む先行研究と差別化できているのか、という初歩的な点を省みることが少なかったように思う。その点をフロアの方々から指摘いただき、自

身の研究に対する姿勢を問われているように感じ、身の引き締まる思いであった。

一方で、女性教師の表象においてはネガティブなものが多いのはやはり事実で、上述のように有島の描き方が「新しい」ということ自体は確かであると考えており、その点は自身の主張として保持したい。有島の「優しい女性教師」像は、石坂洋次郎の一連の作品や、何よりも壺井栄の『二十四の瞳』に先行するものだというのが私の考えなのだが、自身の探し方の甘さもあるのかもしれないものの、そもそも女性教師を扱った作品数自体多くはない。そのような状況にあって、表象の自身に変化が見られるようになったと言えるのかどうか、「一房の葡萄」を変化の起点として位置付けることは妥当なのかどうか、今後研究を突き詰めていく上

で、これらの問題が越えねばならない大きな壁となつていくであらう。

今回扱つた殉職した女性教師・小野訓導のことを初めて知つたのは、修士時代に当時指導教員であつた故・内藤高先生から教示されてであつた。また、「一房の葡萄」論を必ずすべきだと常に言つてくれていたのは、今は研究活動を一時休止している友人である。この二人がいなければ、私の今回の発表はなかつた。この場をお借りして、発表の機会を与えていただいた関西支部の委員の皆様、当日お越しいただいた方々に御礼申し上げますと同時に、このお二人に対し特に謝意を表したい。

発表を終えて

宮園 美佳

今回の発表により中学校の国語教科

書を、近代文学の扱いの観点から改めて検討する好機が与えられたことに感謝したい。

教科書の大判化、多色化は以前から見られるが、教科書で扱う教材文以外の資料の充実は、現行の中学校国語教科書の一つの特色である。授業で扱う学習材以外に「基礎編」「資料編」を区分して掲載しているものや、「資料編」として独立した冊子になっているものまである。

副読本の購入で新たな費用の負担をかけることもなく、指導のための資料がほぼ教科書一冊で網羅できる点は、従来以上に指導上の便宜性が考慮されていると感じた。中学校国語教科書において近代文学の扱いが、解釈を学ぶための学習材から読書教材へと変化しつつあり、特に小説を中心としてその傾向が顕著である。中学生にとって近

代文学は、学習材として日常的に触れる対象から、読む作品を探したり、作家について調べたりの作業が付随する、自発的に関わる姿勢を前提とする存在に変わりつつある。この点を考えると、教科書における資料の充実は、すべての生徒に読書や情報を得る契機を提供する、という点では好ましい傾向と言えよう。

一方で、読書案内、議論や説明のための発想法、歳時記、歌舞伎や能、活字や変体仮名などの字体まで、ありとあらゆる「言葉」に関する事象を過剰に教科書が包摂しようとしているとも感じた。生徒によっては、教科書に掲載されている内容が「言葉」の世界のすべてである、という錯覚、あるいは、近代文学を含む「言葉」の世界に関して、教科書に包摂されない世界が見えてこないといった、漠然とした閉塞感

を抱くのではないか。あらゆる情報があり、無限の広がりがあるように見えて、その世界の外部がない。漠然とした閉塞感を抱かせるという意味で、中学校国語教科書の在り方がインターネッ トに近接してきているのではないだろうか。

今回の発表では、今回の学習指導要領で新たに加わった「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に基づき、中学校国語教科書に見られる、近代文学の作家を言語文化の創造者、担い手として表象する戦略を概観した。現行の学習指導要領の告示から7年が経過し、新たな学習指導要領が視野に入ってくる時期になりつつある。新たな学習指導要領とそれに基づく中学校国語教科書では、近代文学の〈作家／作者〉はどのように表象されるのか、改めて考察を加えたい。

発表を終えて

寺田 守

国語教育研究の立場から、森鷗外の「高瀬舟」について検討した。まず「漱石・鷗外の消えた『国語』教科書」「教科書から消える文豪」といった論調は、何を教えるかどう教えるかとの関係が逆転しており、鷗外の作品を読めば自然と読む力がつくかのような誤解があることを述べた。教える内容があり、そのために「高瀬舟」が選ばれるのではなく、「高瀬舟」がまず存在し、そこから何を教えるかを教師がその都度考えなくてはならない授業作りには課題がある。ここで現れるのは「文豪」というブランドとしての作家だった。続いて、先行研究を検討する中で「高瀬舟」の主題の分裂の問題から、主題という読みの一貫性形成の収束点とし

て使われる作者鷗外について述べた。

「財産と云うものの観念」と「ユウタナジイ」とを読みとったのは「高瀬舟縁起」の鷗外であり、「足ることを知っていること」と「それが罪であろうか」とを「読む」のは喜助の話を知った庄兵衛である。喜助の話を読んだ庄兵衛と並んで、「高瀬舟縁起」の鷗外は、もう一人の読者として「高瀬舟」の読者の前に現れていた。

そして、教室で「高瀬舟」の特徴を生かした学習を成功させるためには、部分の解釈ができる力を学習者が獲得していることが前提となることを述べた。例えば「それを今、目の前で踏み止まって見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気がついた。」という文の「見せてくれる」といった判断を伴う言葉に注目すると、見せることで庄兵衛に恩恵があり、感謝の気持ちを持

っていることが分かる。足ることを知るという意味を、書籍の中や観念上の考えではなく、実際に目に見える形で示しているのが喜助だと庄兵衛は考えたのだろう。

質疑では、「高瀬舟縁起」の鷗外と「高瀬舟」の語り手や庄兵衛の認識とは位相が異なるのではないかという指摘や、詩や短歌といったジャンルを超えた視点が必要ではないかという指摘、前提となる部分の解釈の力を段階的に育てることの難しさのご指摘を頂いた。特に、若い教師とベテランの教師との間で解釈が大きく異なる状況の中で行われる授業のあり方について問題提起していただいた点を重く受けとめた。

国語教育研究を行っている私にとって、文学研究の場で発表する機会は貴重な経験だった。得がたい機会を与え

ていただいたことに感謝申し上げます。今回の経験を今後に生かしていきたい。

秋季大会の発表を終えて

清水 良典

日本近代文学会関西支部では、以前にも村上春樹の特集に招いていただいた。その発表後に執筆した小論「村上春樹とポピュリズム、その不確かな壁」も含めて、批評や研究の立場からの村上春樹へのアプローチは、私自身これまで何度かたちにしてきた。しかし今回与えられた「教室のなかの（作家／作者）」というテーマは、私にとっても未知数の刺激が感じられた。

高校と大学で長年教師をやってきて、村上春樹を教材にしたことは度々ある。

生徒や学生にとっても村上春樹への関心は高い。近年の高校の国語教科書には村上の教材がほぼ全社で採択されてきたが、私が教科書編集委員も務めていた筑摩書房の『国語総合』にも短編「とんがり焼の盛衰」を採択した。「教室」という場で文学作品を扱うことに古くて新しい問題や課題が山積していることはいうまでもないが、そこでさらに村上春樹をいかに読み、教育的に何を伝えるべきかということについては、きちんと考えなければならぬと思っていた。その機会を与えられたことに感謝したい。

教科書に採択された村上の作品は「沈黙」「青が消えた」「鏡」「七番目の男」「レキシントンの幽霊」「カングルー日和」など多岐にわたるが、多くがミステリアスなファンタジーであり、村上の長編もそうであるように、

明確な主題が見出しにくい。それを教材とする際には、一種の寓話あるいはメタファーと理解して、多様な想像をめぐらすしかない。しかしその結果、想像力豊かに解釈するという作品へのコミットメントに対して、任意の想像が拡散するだけで終わってしまうという学習行為へのデータコメントが起るのではないか。現場の教師も、それに悩んでいるのではないかと思われる。その点、作者の作家体験が下敷きになっていることが作者自身によって明らか

されている「とんがり焼の盛衰」は、作者の意図に追従すれば楽屋落ち的な皮肉をたたえた小編で終わってしまうが、そこから離れて教室で独自に読みを展開できる可能性がある特異な教材といえる。

それを話題の突破口として、村上春樹の解読と教室の境界に新しいアプロ

ーチを見出せるのではないかと考えた次第だが、発表は端緒を示しただけで終わってしまい忸怩たる思いである。これからさらに私自身に問いかけながら考えてみたい。

大会印象記

自由発表

原卓史

二〇一四年度秋季大会は、一月一日、京都教育大学で開催された。自由発表の一人目は、小橋玲治氏による「有島武郎『一房の葡萄』の言説空間——大正十一年という磁場——であった。小橋氏は、有島武郎が「一房の葡萄」で作った女性表象は、明治時代の否定的女性教師表象とは異なり、「愛の力」の

ある理想的な女性教師であるとした。こうした女性教師像の変化は、小野訓導殉職事件という同時代の言説空間のなかで「祝祭」へと祀り上げられたのだという。そして、「一房の葡萄」は、「母性」を補助線として小野訓導殉職事件と交錯することを明らかにした。

本発表の意義は、「一房の葡萄」という小説を同時代言説のなかに位置づけたことよって、射程の大きな議論になったことにある。しかし、近年の「一房の葡萄」研究においては、「愛の力」という読みは相対化され、新たな解釈の可能性が示されてきた。たとえば、中村三春氏は女性教師が教室内で孤立している「僕」を放置していたので、彼女は「潔白ではない」と批判している。だとすれば、明治時代に描かれた否定的女性教師表象と同様、当該作品の女性教師もまた否定的な人物として

読めることになる。小橋氏は変化したと捉えているが、否定的女性教師像は継続していると考えることもできるのではないだろうか。解釈の仕方次第で歴史の捉え方が変わってしまうことについて、考察の余地があるように思われた。また、「一房の葡萄」と小野訓導殉職事件の結びつきについて、「両者を直接結びつける言説はない」と小橋氏も指摘している。発表資料のなかからやはり根拠を見つけたことはできず、この結びつきが有効なのかも含めて、もう少し丁寧な解析が必要なのではあるまいか。

自由発表の二人目は、浅子逸男氏による『半七捕物帳』の異同についてであった。浅子氏は、発表前半では、「半七捕物帳」の初出誌と、単行本との本文異同の報告を行った。ここでは半七の年齢の変更や時代設定の変更や、「半

七捕物帳」の人気が出たタイミングなどについて言及があった。発表後半では、「半七捕物帳」と芝居の関係を、本文異同の問題と絡めた報告がなされた。半七が団十郎や菊五郎の芝居を実際に見ていたからこそ、改稿がなされたのだという。そして、岡本綺堂は団十郎や菊五郎が亡くなった後、彼らについて語らないようになっていったことを指摘した。浅子氏は二十年にわたって「半七捕物帳」についての研究を行っており、少なくとも五本の論文を発表している。これまでの研究との決定的な違いは、「半七捕物帳」の本文異同を団十郎や菊五郎との関係で読み解いたことにある。重厚な研究成果は、こうした長年にわたる研究による成果であるといえよう。会場からは、大正・昭和時代の（へ今）に半七が、江戸時代や明治時代のことを語るといふ時代設定

の問題についての質問が出された。複雑に絡まり合う時代をいかに読み解くのか、作品の時代設定を考察することの意味を改めて考えさせられた。私個人としては、もっと後半の話を伺いたいという思いが残った。前半は、既発表論文のなかで繰り返し指摘されている事柄であったからだ。そこは、「既発表論文参照のこと」とし、もっと単純化しても良かったのではないか。とくに後半が刺激的な考察だっただけに、岡本綺堂と芝居の関係について、さらなる研究の進展の必要性を感じた。

小特集

宮川 康

私は教職三十三年目の高校教諭。小特集の冒頭に司会者が述べられた問題

意識——現在の学校現場において、近代文学教材によって教師は何を教えるのか、「作者は何を言いたかったのか」と「生徒が自由に読み取ればよい」という対極の間で、揺れ動いている、というような問題意識は、私も常々共有している。いや、最近の授業実践発表などを見るにつけ、切実である。この点について、三氏の発表は、まるで一つの発表の展開を分担されていると見えるくらい関連していた。

まず、宮蘭美佳氏の発表は、中学校国語の現行学習指導要領において、「近代以降の作家」が「古典に接続するもの」として位置づけられ、具体的には教科書の中で、鷗外・漱石・芥川が、現代日本語とは明確に分断されつつ、現代文の成立に貢献したものととして起ち上げられている、というものであった。氏は、「近代以降の作家」の文学が読解

されるべきものとしてではすでなく、古典や現代文の成立過程を知るためのインデックスとして扱われている問題を、提起されていた。しかも、そのインデックスは、ほぼ前記三作家に特化されてしまっているという。ここには、文学の作家性が明治・大正の言語文化の近代化過程の中に囲い込まれ、現在中学校で読解すべき現代文の文学教材においては、その作家性を括弧に入れてしまってもよいという暗黙の了解

(つまり「生徒の自由な読み取り」の氾濫の誘因)が成立していると言える。次に、寺田守氏の発表は、宮蘭氏の指摘において囲い込まれた作家であった鷗外を、インデックスとしてではなく、読解教材として読む試みである。寺田氏は一般社会の「漱石・鷗外の消えた『国語』教科書」というような問題のとらえ方に、近代作家をインデッ

クス化しようとする意志を読み取られ、そのように鷗外を扱うのではなく、たとえば『高瀬舟』の読解において、教材としての特徴を生かした学習目標を提示された。「知足」と「ユウタナジイ」の関係について抽象度の高い思考を行わせるため、「語り」に着目する方法の学習である。囲い込まれようとする近代作家の一人である鷗外のテキストが、現在も中高の現代文の読解教材として充分存在し得ることを示された。

最後の清水良典氏の発表は、囲い込まれた近代作家に代わって、現代作家の代表として教科書で定番化しつつある村上春樹の教材としての可能性と問題点を述べられたものであった。村上作品は、その多くに存在する寓意とメタファーが「生徒の自由な読み」の可能性を大きく引き出すことが、教材としての際立った特徴であろう。しかも、

それを回収すべき(はずの)作家性は、近代作家ほどには明瞭なものでない。氏は、「ディレクターとしての作者」「メーカーとしての作者」という言葉を使われたが、多くの現代作家の場合、「メーカーとしての作者」の方は括弧に入れるしかなかろう。この場合まさに、「作家」ではなく「ディレクター」としての「作者」が「生徒の自由な読み」をどの程度回収できるものとなるのか、あるいはならないのか、現場の教師の悩みどころとなるのである。

とはいえ、司会者が最初に掲げられた問題意識における対極は、はたして現在、本当に対極として成立しているのだろうか、とも考える。現在、中高の現場の教師に「生徒の自由な読み」をすべて作家性に回収できる力量を持った者がどれほどいるのか。とすれば、対極はむしろそれとして、その両極の

間の中のあたりに国語教師の「安住の地」を見出すべきか。この小特集は、「安住の地」などはしよせん「青い鳥」にすぎないことを、あらためて教えてくれたと言える。

小特集

久保 明恵

近頃の高校現代文の指導書を見ると、「作者の意図」を読もうとする目標よりも、作品の言説そのものにに基づいた解釈を提示しているものが多い。文学研究におけるテクスト論の影響であるが、物語内容の重視によってともすれば道徳教育ともなりがちであった、これまでの国語教育を相対化しようという意図によるものなのだろう。そしてそこでは実体としての「作家」に関

しては、文学史的知識として補足的に扱う程度である。一方、言説主体としての「作者」については、作品の語り手レベルについての言及にとどまっているのが現状である。教養として「作家」の文学史的知識を提示するだけでなく、作品から立ち上る「作者」像とぶつけてみるのが、生徒の読解力養成や、興味関心を高める一助になるのではないか、という漠然とした問題意識を持って、本小特集に臨んだ。

宮蘭氏の発表は、授業で教授者が、どのように「作家／作者」を扱うことが求められているのかを、現行の学習指導要領をもとにまとめたものであった。両者はともに、古典の世界への橋渡しをする存在として扱われており、「作家」は日本文化の担い手として、そして「作者」としては非現代的言語と古文との接続を果たした言語文化の

担い手として位置づけられているとした。

続いて寺田氏は、教科書に掲載される文豪としての〈作家〉鷗外と、『高瀬舟』の一貫した読みを保証する言説主体としての〈作者〉鷗外という、鷗外の二側面を提示した。『高瀬舟』を素材に、作品細部の読解が授業で扱う際には重要であるとし、氏の作成した「登場人物の心情を理解する方法の段階」というカリキュラムの試案に基づいて、作品分析を行った。氏の発表には細部の読みの具体的な提示があったが、授業実践の現場では、語りの分析を構築へと接続することが求められるだろう。どのくらいの分量の作品ならば可能なのか、年間の授業時数が限られている中でどの程度可能なのか、細部の積み重ねによって生徒の読みがいかに変化していったのかなど、実践の報告を是

非知りたいと思った。

最後に清水氏は、村上春樹が教材になる理由としてネームバリュー、ストーリー・テラーとしての魅力、ミステリアスなファンタジー性の三点を指摘し、村上がメイカー〈作家〉性とディレクター〈作者〉性という二つの側面を持つ作家であるとした。氏が「とんがり焼きの盛衰」で分析したように、〈作者〉性と〈作家〉性を作品読解に敷衍することの可能性に興味を覚えた。村上作品に限らず、同じ作者の複数の作品を横断して扱うことで、そこから立ち上がる〈作者〉性を作品に援用し、読解の一助とすることができるとは、ないかと気づかされた。

質疑応答では、教室という解釈共同体のしほりによって生徒個々の実体に即した読解が取り出しにくいという問題、文学のもたらず合理性や整合性へ

ゆさぶりをかける文学の意義が、学校空間で扱われる〈安全〉な作品からこぼれおちることの問題、韻文では書き手について扱うことがより難しいという問題、学校現場における教員の年齢層のゆがみによる指導者間の解釈の揺れという問題など、広範な問題が提起された。

質疑応答中に出た、寓意とメタファに富む村上春樹の作品を授業で扱う際には、解釈の拡散をいかに学習へとまとめるか指導者の力量が問われる、という清水氏の指摘には、背筋の伸びる思いがした。教育には評価が伴う以上、まず指導者自身が〈目利き〉であることが求められるのだということを、改めて自覚させられた小特集であった。

細川 正義 著

『島崎藤村文芸研究』

黒田 俊太郎

本書は、序論「文明批評家・島崎藤村」に続く、詩に関する論文六編、小説に関する論文一六編、計二二編の作品論で構成されている。それらは、『若菜集』から『東方の門』に至る藤村文芸のクロニクルとしての性格を有するものであり、同時に著者・細川正義氏が、四〇年近く綿々と継続してきた「島崎藤村文芸研究」の一つの節目となる著述であるといえる。その意味で本書の目的は、藤村の創作態度の軌跡の追跡ということにとどまらず、岡崎義恵の流れを汲む氏の「文芸学」という研究方法・態度の表明にあつたと見ることができる。

紙幅の都合上、各論文の要約を記す余裕はないが、ここでは、氏が惹かれたという「藤村の日本の伝統を愛し、

国の現在と未来を常に遠望し続けたナショナリズムと、誠実さ」(「おわりに」)ということに触れてみたい。

藤村のナショナリズムと聞くと、『東方の門』に代表される戦中の言論活動に対する、服部之總「青山半蔵―明治絶対主義の下部構造―」(一九五四)・猪野謙二『島崎藤村』(一九五四)などの批判が直ちに想起される。本書の本論が、直接「ナショナリズム」という語を用いて藤村のそれを議論することはないが、本書が問題にしているのも、『東方の門』における「西洋よりする組織的で異質な文明の開発と破壊とに對することの出来たのも、またこの腰骨の力と言ふことが出来よう。／古代と近代とを繋ぐこの国の中世はそこに隠れてゐた。」との認識である。氏は、

丸山真男が列強による「半植民地」状態で発動した「ナショナリズム」を「健康」として肯定したように(「明治国家の思想」一九四九)、藤村のナショナリズムを是認する。

藤村が国民的同一性の基盤としたのは、「伝統」Ⅱ「中世」だった。氏はそれを踏まえ、『夜明け前』の半蔵に「中世は捨てねばならぬ」と主張させることで藤村は「父の時代と思想に対する否定的認識」を示したとする。だが、半蔵が否定した「中世」とは「権力万能の殻」を意味し、そうした発想の源泉は、中世の国学者・本居宣長にあつたのではないか。

半蔵の「中世」否定の言説が、しばしば藤村が「伝統」Ⅱ「中世」の表徴とした宣長の言説に裏打ちされているという構造に、改めて目を向けてみたいと思つた。

(二〇一三年八月一二日 双文社出版

五二八頁 六四〇〇円+税)

池内輝雄・木村一信・竹松良明・土屋忍編
『〈外地〉日本語文学への射程』

大東 和重

『作家のアジア体験』（世界思想社、一九九二年）、『南方徴用作家』（同、九六年）、『〈外地〉日本語文学論』（同、二〇〇七年）につづく本論文集は、計13編を収録する。それぞれに言及する紙幅はない。まず著者名と論の対象について記し、その後全体印象を述べ

る。

台湾・西成彦（佐藤春夫・呂赫若）、垂水千恵（大鹿卓・谷崎潤一郎・山部歌津子）沖野岩三郎？、土屋忍（西川満）。韓国・神谷忠孝『緑旗』『国民文学』、鄭炳浩『朝鮮』『朝鮮之実業』、柳水晶（俞鎮午）。中国（満洲・上海）池内輝雄『観光東亜』、竹松良明（小泉讓）、木田隆文『大陸新報』『長江文学』『上海文学』、三上聡太（黒島傳治）。南洋・木村一信（森三千代）、掛野剛

史（寺崎浩）、橋本正志（中島敦・釘本久春）。

作家・作品研究に、雑誌や新聞芸芸欄に関する研究が加わり、巻末には戦前台湾の文学関係書籍の総目を収める。日本近代文学研究でも、かつて雑誌が

復刻され総目次が熱心に作られた。しかし主要作家の全集刊行が終わった八〇年代前後から、研究といえれば作家論・作品論・テクスト論・文化研究の天下となった。一方〈外地〉日本語文学の研究では、そもそも「主要」と呼べる作家が存在せず、掛野氏が寺崎浩の未刊行長編『荒天飛行』を紹介するように、雑誌・新聞・書籍など一次資料は発掘の途上で、日本人作家の全集はのぞむべくもない。

本書の研究対象に、佐藤春夫・谷崎・

中島敦を除けば、著名作家は少ない。呂赫若や俞鎮午など日本語作家はもちろん、金子光晴ではなく弟の大鹿卓・妻の森三千代、上海では武田泰淳ではなく小泉讓、プロ文では小林多喜二ではなく黒島傳治が選ばれる。寺崎浩は著作の多い作家だが、現在では報道班員だったことから論じられるわけで、論じ方の角度は必ずしも純粋な文学的達成度からではない。

〈外地〉文学研究が日本文学研究に貢献するのは、「日本文学」の輪郭を、資料や作家の選択、研究の手法や論の切り口において問い直すからである。

読み進めながら、植民地や占領地の文壇に働く力学や、大鹿卓や俞鎮午・小泉讓・寺崎浩らの目を通した当時の文学はどういうものだったか、強い関心もこの内実が異なるのであり、そこに〈外地〉文学研究の意味がある。

（二〇一四年三月二八日 双文社出版

二一八〇頁 六四〇〇円十税）

三品 理絵 著

『草叢の迷宮——泉鏡花の文様の想像力』

西川 貴子

泉鏡花の作品が、読者を幻惑させ、不思議な世界へと誘う何ともいえない魅力を有していることは余りにも有名である。しかし、この独自の作品世界がどのように形成されているのか、その仕掛けを解き明かすのは至難の技だ。本書はそのような難解な作業に真っ向から取り組んだ書だといえる。著者は、鏡花作品に施された植物の「意匠」に注目し、言葉の一つ一つに仕掛けられたイメージの連鎖（本書ではそれを「文様の想像力」と呼んでいる）を解きほぐすことで、鏡花作品における連想の（システム）を鮮やかに浮き彫りにしている。

本書では、『草迷宮』『卵塔場の天女』『古格』『菊あはせ』『白花の朝顔』などの作品が取り上げられている。一つ

一つの作品論としても読み応えがあるが、鏡花の思想の変遷も見られ興味深い。第一部では、逗子を舞台とした『草迷宮』と『武蔵野』が歌絵の趣向を媒介として「草」の意匠として結びつくというスリリングな論が提示されている。そして、ともすれば、看過されがちであった「草」の機能（隠すもの）であると同時に（隠されたもの）を顕現する機能が明らかにされていく。また、鏡花がこうした草の「意匠」に目を向け、以後も植物の「意匠」を取り入れた「文様の想像力」を展開していく背景として、同時代の園芸趣味の流行、前田曙山との交流、写実主義的自然主義に抗する「意匠的自然主義」の選択が挙げられている。第二部では、稲垣足穂や三島由紀夫の作品とともに

日本文学における能楽受容のあり方が確認され、鏡花が能の詞章をどのように取り入れイメージを紡いでいったかについて、『羽衣』『歌占』と『卵塔場の天女』との関係から分析されている。第三部では、「市場」の機能が指摘され、『古格』が「解体と再生の物語」として読み解かれる。また『菊あはせ』では、作品内に散りばめられた「きく（菊・訊く）」のイメージに注目することで、「解体と再生」の中で自身の「老い」を見つめ直そうとした物語として読解されており、興味深い。

和歌、絵画、能楽、衣装、和菓子などの様々な「意匠」を追いながら、言葉が有する重層的なイメージの連鎖を丁寧に解きほぐしていく本書は、鏡花作品の魅力のみならず「言」の「葉」によって綴られる「文学作品」の豊穡さを教えてくれる好著である。

（二〇一四年七月三十一日 ナカニシヤ出版 一六一頁 三八〇〇円＋税）

岸元 次子 著

『漱石の表現——その技巧が読者に幻惑を生む』

吉川 仁子

本書は、『虞美人草』から『明暗』まで、小品を除く漱石の新聞小説十作品についての表現面からの論考である。

「第一部 漱石の表現」では、『門』の表記・用字の面白さ、『坑夫』の換喩表現を始めとする比喩表現を分析する。

「第二部 作品に描かれる象徴」では、一章で作品内の気象現象(『門』の「風」、『それから』の「雨」、『三四郎』の「雲」)の象徴性を論じる。二章一節では『それから』の指環が真珠の指環である意味を問い、真珠を「三千代の薄幸な運命の象徴」と見る。二章二節、『門』の「孟宗竹」の象徴性を論じる中で、竹の生態を元に、孟宗竹が「子供に恵まれない夫婦」を象徴するという指摘は新鮮だった。「第三部 後期三部作における語りの転換」は本書中最も興味深

かった。著者は、後期三部作の特色である短篇連鎖、語り手の交代、書簡による告白という構造に、従来から短篇連鎖については影響が指摘される『新アラビヤ夜話』ではなく、同じスチーヴンソンの『ジークル博士とハイド氏』(吉川注・以下『ジークル』と表記)との重なりが顕著に見えてくる」と述べる。『ジークル』では前段でアタスン弁護士が外側から見たことを語り、後段ではラニョンとジークルの手紙で謎解きがなされる。対して後期三部作では、前段で敬太郎・二郎・青年「私」が主人公を「外から見」、後段は「主人公による「告白」又は「告白書」で構成され、「手紙の終わりで以て作品が唐突に終わる」。また、最後に書簡体を用いることで『文学論』の「間隔論」

で展開される「空間短縮法」を実践し〈読者の幻惑〉を生んでいるとする。構造の類似は、なるほどと思わされたが、形式面だけでなく内容面からの対応を見ても面白いのではないか。「第四部 顕著に見られる視点の転換」では、二章二節の『道草』における「彼」という語の多用の指摘が興味深かったが、文体の面にとどまらず意味づけできるのではないか。

書名や第一部「序」に示されるように著者が表現に着目する背後には『文学論』への意識があり、ならば、『文学論』との関連の説明がもう少しほしい。また、先行論をもう少し細かく示してもよいのではないか。

全体として、著者筆のカバーの百合の絵に窺える眼差し同様に、著者が作品の細部を丁寧に見、考察していることが伝わる書である。

(二〇一四年八月二五日 和泉書院)

三四五頁 五五〇〇円+税)

会議の記録（二〇一四年度）

四月一九日（土）

〔運営委員会〕二〇一四年度運営体制について（委員名簿の確認、役割分担確認）、『滋賀近代文学事典』に関して、二〇一四年度春季大会について（プログラム・当日の運営・役割分担の確認、印象記執筆者候補の選定）、二〇一四年度秋季大会について（特集趣旨文の確認、登壇者候補の人選、他団体との連携について）、会計報告・予算について、連続企画出版について、今後の企画について、年間スケジュールの確認、「会報」第一九号発送作業。（奈良大学）

六月七日（土）

〔運営委員会〕二〇一四年度春季大会および総会について（スケジュール・役割分担・総会の議題の確認、議長団の人選、会計報告・予算案の確認、支部長・運営委員長の任期延長について）、

二〇一四年度秋季大会について（プログラム案の作成、自由発表について、小特集企画について、他団体との連携について）、支部企画出版の翻訳に関して、「会報」第二〇号について（書評欄の採否について、締切等の確認、紙面構成について）、今後の関西支部の運営について（スケジュールの確認、連続企画案について、出版事業について）。

〔総会〕新運営委員紹介、二〇一三年度事業報告、二〇一三年度会計報告、二〇一三年度会計監査報告、二〇一四年度事業計画、二〇一四年度予算案、運営委員長の任期延長について。（奈良大学）

六月上旬

二〇一五年度以降の支部企画に関するWG、メール会議。（三月下旬まで随時実施）

七月二〇日（日）

〔二〇一五年度以降の企画に関する会議〕WG・メール会議の議論整理、企画素案の確定、今後のスケジュールについて。

七月二六日（土）

〔運営委員会〕『滋賀近代文学事典』の交換について、二〇一四年度秋季大会について（自由発表について、小特集企画について、他団体との連携について）、二〇一五年度春季大会について（日程および会場校について）、連続企画の出版について、「会報」第二〇号について（編集スケジュールの確認、内容確認と校正、電子公開のタイミニングについて）、支部長選考委員会について（選考委員会の人選、スケジュールの確認）、支部会員名簿の取扱いについて（キャンパスプラザ京都）

八月二十八日(木)

〔支部長選考会議〕選考過程に関する確認、支部長候補の選出、スケジュールの確認。

九月二十七日(土)

〔運営委員会〕『滋賀近代文学事典』について、次期支部長候補の決定について、二〇一四年度秋季大会について(スケジュール・役割分担の確認、印象記執筆者の人選、大会ポスターの発送費について)、臨時総会の議題について、連続企画出版について(編集代表および編集委員会に関する再確認、スケジュールについて)、二〇一五年度秋季大会からの連続企画について、二〇一五年度春季大会について(会場の確認、発表者募集方法の検討)、「会報」書評欄について(書評対象図書の採否、執筆担当者の人選)。「会報」第二〇号発送作業。(奈良大学)

十一月一日(土)

〔運営委員会〕二〇一四年度秋季大会について(協賛団体の離脱について、スケジュール・役割分担・印象記執筆者の確認、臨時総会議題の確認、議長団の人選)。二〇一五年度春季大会について(自由発表の公募について、締切等の確認)、二〇一五年度春季大会以降の連続企画について(タイトルの検討、スケジュールの確認)、「会報」書評欄について(書評対象図書の採否、執筆担当者の人選)。運営委員会の日程について。

〔臨時総会〕次期支部長の選出および承認について、連続企画出版について、二〇一五年度春季大会について、二〇一五年度秋季大会について、二〇一七年度春季大会の連続企画について。(京都教育大学)

十二月一日(日)

〔連続企画検討会議〕企画タイトルについて、趣旨文について、第一回の登壇者候補について、各回の内容について。

十二月二日(日)

〔運営委員会〕二〇一五年度春季大会について(自由発表について、公募の告知方法について)、二〇一五年度秋季大会連続企画について(タイトルについて、趣旨文について、登壇候補者について)、「会報」について(第二一号発行スケジュール・入稿状況の確認、第二二号書評欄について)、新年度体制について(運営委員の定数について、新運営委員の人選について)、連続企画の出版について(編集体制の構築、スケジュールの確認、シンポジウム部分の収録範囲について、タイトル・校正等について、運営委員会との連携について)。(西宮市立甲東センター)

二月二十八日(土)

〔企画出版編集会議〕編集体制の確認、スケジュールの確認、シンポジウムの収録部分について、本書タイトルについて、目次案の検討。

〔運営委員会〕『滋賀近代文学事典』について、企画出版について、二〇一五年度春季大会について(自由発表応募の採否、タイムテーブルの検討、今後のスケジュールについて)、二〇一五年度秋季大会について(会場校について、プログラムについて)連続企画について(スケジュールの確認、趣旨文の検討、登壇候補者の人選について)、「会報」編集作業について(第二二号編集作業の確認および校正、第二二号書評欄について)、新年度運営体制について(支部長の交代について、運営委員の退任と補充について)。(奈良大学)

三月五日(木)

〔支部長交替にかかわる事務引継会議〕(運営委員会の構成について、年間スケジュールの概要、継続課題の確認)。

三月二一日(土)

〔運営委員会〕新規運営委員の紹介、二〇一五年度年間スケジュールの確認、運営委員各担当の決定と引継ぎ、二〇一五年度春季大会について(プログラム・スケジュールの確認)、二〇一五年度秋季大会について(連続企画趣旨文の再検討、プログラムについて、登壇候補者の人選)、会計報告および予算案について、支部長選考方法について、「会報」の編集について(第二一号の内容確認・校正作業、第二二号書評欄について)。(奈良大学)

二〇一四年度役員

支部長 大橋毅彦
運営委員長 木田隆文
運営委員 天野勝重
岡村知子
金岡直子
重松恵美
関肇
高橋幸平
長原しのぶ
信時哲郎
ホルカ・イリナ

天野知幸
小川直美
坂堅太
須田千里
高木彬
戸塚麻子
西山康一
山崎正純
山本欣司
山田哲久
和田崇

二〇一五年度秋季大会より二〇一七年度春季大会まで四回、左記のテーマにて連続企画を予定しております。

《異^い》なる関西 — 1920・30年代を中心として —

趣旨

本企画は、関西の文芸文化の中でこれまで必ずしも光が当てられてこなかった対象——人・風土・メディアなど——を新たに考察・評価する試みである。ただ、本企画は、埋もれた対象の発掘作業に終始するものではない。その狙いには、自らの居るこの「関西」という場所自体を批評的に問い直し、既成の史的枠組みや知識で捉えられてきた関西における文芸文化の姿をも再考することを含んでいる。これまでの認識に揺さぶりをかけるような「《異》なる関西」を探求することで、新しい文学観や地勢図が開かれるかもしれない。

その検討に際し、ひとまず中心とするのは、1920・30年代である。この時期、大規模な経済的、社会的変動を背景としてモダン文化が勃興したことはよく知られているが、関西ではどのような動きがあったのだろうか。たとえば、佐藤春夫や稲垣足穂と関係の深い神戸の詩人、石野重道。彼はどのようなメディアに自身の作品を発表し、また、いかなるネットワークの中で活動していたのか。そして、彼（とその周囲の表現者たち）を創作へと駆り立てたエネルギーとは、いかなる強度と広がりを持つものであったのか。——一つの事象を核として明らかにされていく、まだ知られていない関西文芸文化の側面は、他にも多くあるだろう。

また、この時代の前後に、その検討対象を準備／継承／更新したものがあられるならば、それも議論の範囲に含めてもよいだろう。「関西」を軸に、既成の枠組みを問い直すダイナミズムやドラマを掬い上げることで、「関西」自体が内と外との双方に対して、その《異》なる相貌を現すことを企図している。

支部内外からの様々なアプローチによって、新しい知見が議論を通して得られることを期待している。

二〇一五年度関西支部秋季大会のお知らせ

連続企画「《異》なる関西―1920・30年代を中心として―」の第一回として、左記の要領にて開催いたします。

タイトル 《異》なる関西―1920・30年代を中心として―

日時会場 二〇一五年一月七日（土） 大阪大学

○報告者・内容等の詳細はHPにてお知らせします。なお、二回目以降は発表者を募ります。積極的なご応募をお待ちしております。

事務局便り

○ 献本のお願い

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象に、書評欄を設置いたしました。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

● 対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

● 送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

○ 維持会費納入のお願い

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしくお願ひします。

○ 関西支部二〇一五年度役員（〇…：新規役員）

○ 浅子逸男（支部長） 天野勝重 天野知幸 岡村知子 木田隆文（委員長） ○ 齋藤理生 坂堅太 重松恵美 須田千里

関肇 高木彬 高橋幸平 ○ 瀧本和成 戸塚麻子 ○ 中谷いずみ 西山康一 信時哲郎 ○ 福岡弘彬 ホルカ・イリナ

前田貞昭 山崎正純 山田哲久 ○ 山本昭宏 山本欣司 和田崇

○ 日本近代文学会関西支部事務局 〒631-8502 奈良市山陵町一五〇〇 奈良大学 木田隆文研究室内